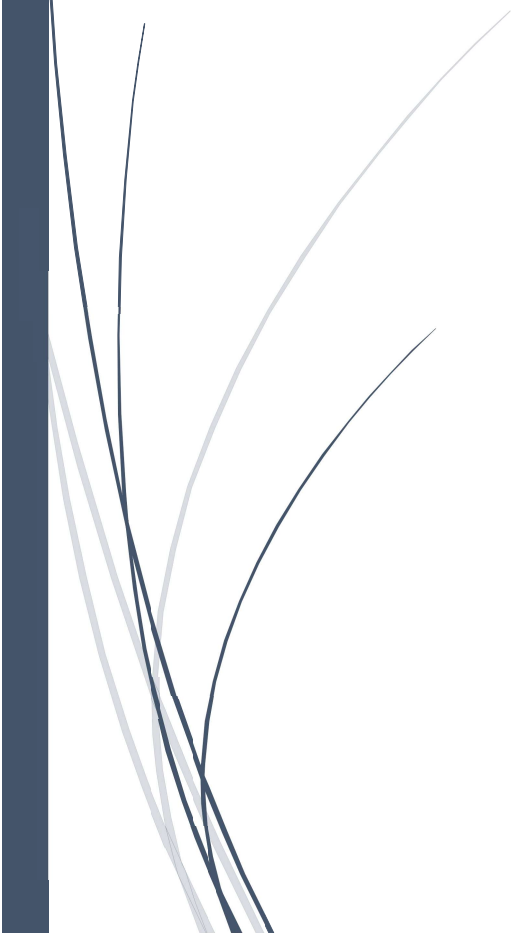




# 2023年度 鈴木良ゼミ3回生 調査報告書



同志社大学社会学部社会福祉学科  
2023年度 鈴木良研究室 3回生ゼミ

市村杏莉、岩田真奈、垣外中茉乃  
金原初花、桃野峻輔、中村杏  
佐竹皓介、千田佳奈、高橋裕人  
宇佐見梨夏、山本佳奈、山下杏樹、安嶋泉

## 目次

巻頭言 2023年度3回生鈴木良ゼミの活動報告

鈴木 良

第1章 豊中市のインクルーシブ教育の実践内容についての考察～障害当事者へのインタビューを通して～

岩田真奈・宇佐見梨夏・佐竹皓介・高橋裕人・山本佳奈

第2章 共に生きるために必要なもの～ダウン症児の母の生活史に依拠して～

市村杏莉・垣外中菜乃・金原初花・千田佳奈・山下杏樹

第3章 障害者のイメージ形成とメディアの役割～パンジーメディアにおけるフィールドワークから考察する～

安嶋泉・中村杏・桃野峻輔

資料 報告会でのパワーポイント資料

## 2023 年度 3 回生鈴木良ゼミの活動報告

鈴木 良

私の 3 回生のゼミでは、実際にインタビュー調査やフィールドワークを行ない、この結果をもとに研究論文を書いて、社会に発信することを目的に活動をしています。2023 年度は、1) インクルーシブ教育、2) 障害児家族会、3) メディアと福祉のグループに分かれて、調査の事前準備と論文執筆、そして同志社社会福祉学会でのポスター発表、シンポジウム形式の報告会での発表を行ってきました。

私たちのゼミでは、学生個々人の希望やペースを尊重しているため、それぞれのフィールドワークやインタビューへの参加、ポスター発表や報告会への参加/不参加は自由に行っています。参加したいと思う人が参加しながら、それぞれが学んだことを社会に発信しています。学生一人ひとりが無理のない範囲内で、それぞれがしたいと思うことをゆっくり、確実に行うということをモットーにゼミを運営してきました。

学生には負担をかけず、授業時間内で作業を終えられるように、私は様々な努力や工夫をしてきました。多くの時間をかけることができないため、報告内容としては不十分なところもあります。ただし、私も分析や執筆に全面的に協力することによって、社会的に意味のある文章を発信することが可能になっているのではないかと考えています。

### 1. NHK プロデューサーへのインタビュー

2023 年 6 月 19 日の鈴木ゼミにおいて、3 回生の学生による NHK プロデューサー兼解説委員の竹内哲哉さんへのインタビューを行ないました。竹内さんは 3 歳 4 カ月の時の急性脊髄炎の後遺症のため車いすで生活をしています。竹内さんには、生い立ちから始まり、NHK 入局時のことやハートネット TV・パラリンピック特集番組や解説委員の番組作りのこと、障害や福祉領域におけるメディアの役割などの質問にお答えいただきました。

障害のある当事者が番組制作に関わることの意義について、竹内さんからは制作者の意識が変わることが指摘されました。竹内さんは「感じられるか感じられないかっていうのは、当事者じゃないと分からないこともあるかもしれない」と話されておりました。NHK の職場には、これまでの人生において障害のある人と関わった経験のない人が多くいるため、こうした中で障害のことを扱った番組を制作するためには、障害のある当事者がその場所にいるというだけで大きな効果が生まれるということでした。

学生たちが最も関心のあるメディアによって福祉や障害への理解を深められるのかという質問については、パラリンピック番組を通して説明されていました。特に東京パラリンピックでの報道は、マイノリティーをターゲットにしているのではなく、できる限り多くの人に見てもらえるように作られており、障害のない人が障害のある人の理解を深める最大の手段のひとつとして位置づけられたということでした。しかし、「スーパーエリート

障害者」のイメージが先行すると、「スーパーにしなければいけない」あるいは「スーパーではない」とされる人たちとの分断を生み出すリスクもあり、「すごく悩ましい」と話されていました。また、多くの人から関心を持たれないテーマをマジョリティーに向けて番組で扱うには、それなりの工夫をしないと見てもらえないので番組を作る上での難しさも指摘されました。

竹内さんは、「メディアは弱者に立つべきだと僕は思っている。(中略)。僕は声なき声を拾って、それをきちんと伝えていくってことが、本来の役割なんじゃない」と話されていました。学生がこれから関わろうとする福祉は「弱者に立つべき」領域に他なりません。弱者の側に立つメディアと福祉が社会を変えるためにどのように連携しうるのか。学生たちには、引き続き、この難問について自分たちなりに考えてもらいたいと思います。



写真 zoomでの学生によるインタビューの様子

## 2. 京都トライアングルのインタビューと訪問

2023年7月3日に3回生ゼミで京都トライアングルの元代表で、タウン症児の母である佐々木和子さんにインタビューをしました。また、2023年7月9日に佐々木さんの息子で自立生活している元晴さんの自宅を訪問し、その後、ダウン症児の親の会である京都トライアングルによる親子相談の様子を見学しました。

佐々木さんからは、息子の元晴さんが誕生してから、京都トライアングルの活動についてお話をいただきました。元晴さんは、小中学は普通学校の普通学級に通い、高校は一般の通信制高校に行き、卒業後、しばらくしてから自立生活を始め、一般就労の場で働いています。障害程度は中度ですが、佐々木さん親子は、障害のない人たちと共に生きることを重視してきました。私たちとしては、このように共に生きるということがなぜ重要だったのか、これはどのようにして可能になったのかということをお伺いしました。

息子さんが生まれたときに、ダウン症についての知識がなかった自分自身にショックを受けたと佐々木さんは語ります。多くの親はダウン症の子が生まれたことに対してショックを受けるのに対して、知識のない親自らのことにショックを受けたということ自体に、

障害のある人のためには、受け入れる側の社会や健常者が変わる必要があることが示されています。その後、佐々木さんは、社会にある壁を解消するために「闘い」の日々が始まったこと、それでも、今から振り返ると「あの子を育てて、苦勞と思ったことがない。なんて面白いというか楽しい。とにかく面白い」とにこやかにお話されました。

元晴さんは、小中学では普通学校の普通学級に通学してきました。このとき、「まず一番困ったのが校長。校長は、もともと入れる気ななかなかったから、ものすごい抵抗にあったし、それを強引に入れたわけだから。それが困ったこと」だと佐々木さんは語ります。そして、こうした抵抗にも関わらず、元春さんを入学させることができたのは、東京を拠点に活動する「障害児を普通学級へ全国連絡会」の支えがあったからだと言います。

佐々木さんは、子どもたち同士の関わりこそ重要であり、それが現在、元治さんが一人暮らしをすることにつながっていくと言います。

「それはもう大人が介入なんかなくていい。もう先生なんか邪魔。先生がいないほうが、子ども同士でちゃんと学んでいくので、一緒にいるのが当たり前になってきました。元治が自ら1人暮らしを選んだのは、そんなあたりから生まれたんだなって。」

中学3年生のときに高等養護学校に行くための条件である支援級に行くことを担任教員に勧められましたが、それは拒否されました。中学校を卒業した後は、通信制の高校に通うことになりました。それは、養護学校ではなく、一般の高校に行くこと自体が佐々木さんにとっては重要だったからでした。その後、元晴さんは自宅で生活しましたが、35歳のときに一人暮らしをすることになります。このときに6歳離れた姉の1人暮らしが大きかったと言います。姉が18歳で大学に行くために家を出た際に1人暮らしをしている部屋に元治さんを連れて行った際に、「顔が輝いてんねん、びっくりした」ということでした。

ただし、一人暮らしをするためにはヘルパーや住宅の確保など様々な取り組みが必要になります。このときに大きな支えとなったのが、障害当事者団体である日本自立生活センターでした。ここで、障害当事者と出会い、彼らの支えを通して、自立生活を実現させていきました。そして、HELPというスーパーで一般就労をしていますが、これを紹介してくれたのは、普通学校のときのPTAのお母さんということでした。普通学校での出会い、そして、社会一般での様々な団体の支えを通して、元晴さんの自立生活が実現されたことを私たちは学びました。

7月9日の午前中に、ゼミ生と共に元晴さんの自宅を訪問しました。元晴さんからは、一人暮らしの楽しさを多く話していただきました。好きな競馬の騎手のことやCDの話、普段、HELPという店で就労していることや旅行に行ったときのことを話していただきました。学生たちは、中度の知的障害があっても、親に頼ることなく自ら様々なことができること、これによって、母親も子から自律できるということを学ぶことができました。



写真：元晴さんとゼミ生とが話している様子

7月9日の午後には、京都トライアングルの親子相談の様子を見学させていただきました。このときは、数組のダウン症児の親子の悩みに、京都トライアングルのメンバーである佐々木さんや島寄さんが相談に応じていました。例えば、言葉がなかなか出ない娘に対してどのように接すればよいのか、ということが相談されていました。佐々木さんからは、この子なりの表現する方法を大切にすることや、発達が遅れていても他の子と比較しないことが重要だということが語られていました。島寄さんからは、それでも、他の子どもと比較してしまい、発達の遅れを心配することも親であることも話されていました。それぞれが自らの経験を踏まえて話されているために説得力があると感じました。

これらの経験を通して、学生たちは障害のある人が障害のない人と共に生きていくことを支えるためには、親がどのような思いをもち、どのような支えが必要なのかということ学ぶことができました。インタビューと訪問の機会を提供して下さった京都トライアングルの皆様には改めて感謝申し上げます。

### 3. 豊中インクルーシブ教育を受けた当事者へのインタビュー

2023年7月10日に、豊中市自立生活センターで活動する障害当事者の上田哲郎さんに3回生の皆さんがインタビューをしました。2023年3月10日には、私個人でも上田さんに生活史についてのインタビューをしています。

上田さんは小学入学時に、豊中市の普通学校に入学しましたが、1年生の秋に1年以上、親元を離れて、施設に入所しながら養護学校に通学した経験をしていました。その後、3年生のときから豊中市の普通学校である東豊台小学校に通うようになりました。親は上田さんを地域の学校で学んでもらいたいと考えていたことが大きかったといいます。母も中学校に歩行に障害のある子がいて、過ごしたことが関係しているのではないかと上田さんは語っていました。3年生のときに再び普通学校に戻ったときを次のように語ります。

「最初は、泣きじゃくっていました。なんで、泣きじゃくってかっていうと、やっぱりさっき言った、がやがや感が、はんぱ。だって、例えばですよ、給食のときの、ことを、

思い出します。いろんな、音が、あるじゃないですか。～養護学校ではほぼほぼ、皆無やったんです。」

小学校低学年時に普通学級に戻ったからこそ、普通学校にも慣れ、社会一般の生活に慣れ、大人になってから自立生活ができたと言います。障害があっても普通学級で学ぶことを原則としている豊中市のインクルーシブ教育のシステムがあったからこそ、上田さんは小学校と中学校を普通学級で過ごすことができたということでした。

まず、担任教員の考え方にあると言います。例えば、上田さんが調子が悪いということで、支援学級に行くことを伝えても、担任からは「ゴザ用意しているから、教室の後ろのあそこに敷いて、寝ときなあって。」と言われたということです。皆と一緒に椅子に座って授業を受けるのではなく、調子が悪い場合にはゴザで寝ていることも可能な対応でした。これは今で言う合理的配慮に相当します。

次に、教員は必要以上に介入することではなく、生徒同士の関係性を重視し生徒同士で問題を解決するということが自然になされていました。上田さんは「キックベースとか、ドッチボールとかも、俺が、行けば、なんとなく、自然に、上田がおるから、なんか、ルールを考えようかと、言ってくれる子もおったし。それなら、それだって言ってくれる子も、出て来るし。」と語ります。

さらに、障害児学級担任が普通学級に行くという方法が採用されていたということです。これが豊中方式と呼ばれる支援方法です。上田さんは、「習字のときだったら、時間がかかりそうなきは、いつのまにか、障害児学級の担任の先生が、入ってくれたりとか」したと語ります。

こうした担任教員の対応、生徒同士の対応、障害児学級担任による支援、という仕組みは長年の豊中市のインクルーシブ教育が蓄積された中で、結果的に作られたシステムであり、文化といえるものでした。学生たちは、善意によるものではなく、システムや文化として作られている豊中市インクルーシブ教育に感銘を受けていました。上田さん、ありがとうございました。

#### 4. パンジー・メディアへのインタビューと訪問

7月17日（月）にゼミ3回生のメディア班の学生たちが、社会福祉法人創思苑のパンジー・メディアのディレクターである小川道幸さんと、当法人の理事長の林淑美さんにインタビューをしました。また、9月12日（火）には、私のパンジーでの調査に学生たちも同行し、パンジー・メディアの活動を見学したり、関係者と意見交換をしたりしました。パンジー・メディアは、東大阪市で知的障害のある当事者がインターネット放送を用いた番組を制作しています。この活動を通して、自分たちの思いや考え、社会への問いかけなどを発信しています。

インタビューでは、パンジー設立の経緯やメディア活動の特徴についてのお話をして

らいました。小川さんはアマゾンや山々といった大自然を舞台にメディア制作を行ってき  
ていて、パンジーと出会う前は知的障害のことは知らなかったということでした。それ  
も、異なる文化と出会うという感覚を大事にしていると話されます。こちらの価値観を相  
手に押しつけるのではなく、相手の文化から学ぼうとする感覚は、これまでの活動と共通  
する姿勢でした。パンジーでは、設立当初から、健常者ではなく、知的障害のある当事者  
の視点から活動を行うことを大切にきており、小川さんの当事者の文化を大切にする  
姿勢とパンジーの理念とが重なるかたちで、活動が行われていることを感じました。

パンジーマディアの番組の構成は 4 つあります。第一に、『パンジーの眼』であり、こ  
れは今のニュースを伝えるものです。第二に、『私の歴史』でありその人の生活史を語る  
ものです。第三に、『パンジーキッチン』で、知的障害者でも理解できる料理のレシピを  
紹介するものです。最後は、自由で、ドキュメンタリーやドラマが制作されています。

12 日には、「パンジーの眼」のリハーサル現場を訪問させていただきました。番組制作  
においては、プロのメディア制作スタッフではなく、当事者とスタッフが協力して行っ  
ています。機材を扱うこと自体も当事者と職員が行っています。プロの関係者が関わると、  
健常者の価値観で作られてしまうので、それを回避したということでした。

例えば、知的障害のある当事者がキャスターをしたり、スイッチャー（カメラの切り替  
え）を担当したり、音の敏感な視覚障害のある当事者にはノイズチェックをしてもらった  
り、アシスタント・ディレクターとして指示を送っている当事者もおりました。当事者に  
応じた支援も提供されています。第 2 カメラの操作を担当している知的障害のある当事者  
に、第 1 と第 2 カメラを担当する職員が必要に応じて支援を行っていました。



**写真 知的障害のある当事者がカメラを担当している様子**

リハーサル後に、学生たちとパンジー・メディアの制作に関わる当事者とお話をする機  
会をもちました。学生からは、他にやりたい役割はないかという質問が出され、当事者か  
らはディレクターを行なってみたいことや、編集をやってみたいことなどが出されていま  
した。これらは今は小川さんが行っていますが、将来どのように当事者が行えるのか、と  
ても楽しみだなあと感じました。



学生からは、パンジー・メディアの当事者が生き生きと活動をしていることがとても印象に残ったようでした。学生たちは、知的障害のある当事者が機材の担当といった裏方の役割を担っていることに大変感銘を受けていました。キャスターといった華やかな役割を当事者が担うことはありますが、難しい機材の操作を支援者の助けを借りながら行っていることには驚いているようでした。



**写真** パンジーの当事者と学生とが懇談している様子

訪問終了後に、学生からは、「パンジーの映画をゼミで上映会をしよう」、という声がありました。学生にとって、とても印象に残る訪問だったようです。パンジーの皆様、ありがとうございました。

## 5. ポスター発表

2023年12月2日に開催された同志社社会福祉学会の大会で、鈴木ゼミ3回生の3グループがポスター発表しました。春学期から行ってきたそれぞれのテーマごとの調査結果を報告する機会になりました。

一つのグループは、大阪府豊中市のインクルーシブ教育を受けた当事者へのインタビューに基づく発表です。現在自立生活センター豊中で活躍される障害当事者の上田哲郎さんへのインタビューから、豊中市のインクルーシブ教育の特徴をまとめた内容となりました。豊中市の公立学校では、教員の思いだけではなくシステムとしてインクルーシブ教育を行うことがなされていること、子ども同士の相互の学び合いや助け合いが大事にされていること、入り込みという支援学級教員が普通学級に入りながら支援をする体制が形成されていることが報告されました。こうした教育を受けた結果、成人になった後の自立生活に繋がっていることが結論として述べられていました。



**写真 インクルーシブ教育班のポスター発表の様子**

二つ目のグループは、京都市のダウン症児の親の会であるトライアングルの元代表である佐々木和子さんへのインタビューや、その息子さんである元晴さんのご自宅の訪問、さらには、トライアングルの親子相談の活動参加から、共に生きることを目指す親のことについて発表しました。佐々木さんは、小中は普通学級に通い、高校は通信制の普通高校に通いました。その後は、施設やグループホームではなく、一人暮らしを実現させています。共に生きる事を支えたのは、フォーマル・インフォーマルな支えがあったことや、それによって親の考え方が転換していったことが説明されました。



**写真 京都トライアングルの親支援のグループの発表**

三つ目のグループは、メディアにおける障害の表象について研究してきた学生の発表です。このグループは、東大阪市で活動する社会福祉法人創思苑のパンジーメディアの活動について発表しました。ここは、知的障害のある当事者がメディア制作に参加し、知的障害者の視点から情報を発信する活動をしています。パンジーメディアの理事長やディレクターへのインタビューやメディア制作現場への訪問を通して学んだことを報告しました。



**写真 メディア班による発表**

3つのグループの発表については、発表後に有意義な質疑応答の時間をもつことができました。学生たちにとって学会発表は初めての経験だったと思いますが、貴重な機会となったと満足している様子でした。ご意見を下さった皆様には改めて感謝申し上げます。

## 6. シンポジウム

2023年12月18日の4限(14:55~16:25)にR201にて、鈴木ゼミ3回生による調査報告会を行ないました。3回生はこの1年間を通して、3つのグループに分かれ、それぞれ1)大阪豊中市インクルーシブ教育、2)京都市トライアングルの家族支援、3)東大阪市パンジーのメディア活動というテーマで調査研究をし、研究成果の報告をしていただきました。

ゲストには、豊中市インクルーシブ教育経験者で今回のインタビュー調査をお引きうけ下さった上田哲郎さんや、本学院生で食物アレルギーの子どもの母親で子のアドボカシーの観点から研究している小谷智恵さんにお越しいただき、指定質問をしていただきました。

指定質問とその後のディスカッションでは、いくつかの重要な質問がなされました。たとえば、子どもが「普通学級の間にはいたくない」と言った場合にどのように対応すべきか、ということでした。上田さんのエピソードの中で、小学校低学年時に特別支援学校から普通学校の普通学級に転校したばかりの頃、教室内の音や授業スタイルの違いにしんどさを抱え、支援学級に行きたいと担任教員に求めたところ、その担任教員はごぎを敷いて後ろで座っていてもいいからということ、普通学級にいることを勧めました。この対応が子どもの意思を尊重するという観点からどのように考えるべきなのかということが疑問点として提示されていました。

上田さんからは、結果的に、あのとき支援学級に行っていたら、自分が他の生徒とは違う存在として見られてしまい、クラスで起きている出来事も体験することができなかったこと、そして、クラスに留まることによって普通学級のスタイルにも慣れ、多くの友人を作ることができたので、担任教員には感謝しているとコメントしていただきました。これは、結果的に良い結果がもたらされたから良かったのか、もし良い結果ではなかったら悪

い対応となるのか、と学生たちは悩んでおりました。

あるいは、学生からは、子どもの置かれた条件を考えることの重要性が指摘されました。つまり、特別支援学校に長年いたため普通学級に慣れていなかったことが問題であり、このような環境に置かれていたことを考慮して、普通学級での体験の機会を提供すべきだという意見でした。

子どものアドボカシーは、まさに判断能力に限界のある人々の意思決定をどう支えるのかということと関係します。上田さんも語っていましたが、担任教員の教育や社会に対する思想や価値観が問われるのだと思います。子どもがそう言ったらその通りにするというのではなく、インクルーシブな教育や社会とはどのようなものかというビジョンをしっかりと持ち、それを実現させるために子どもへの配慮を実質的に保障していく努力をし続けることなのだと思います。

今の日本の教育の現状を考えると、このような教育環境を実現させていくことにはかなりの困難が伴います。ただし、豊中市は、一人ひとりの担任教員だけではなく、相互の教員間の支え合い、さらには、学校と家族とのつながりの中で、システムとしてインクルーシブな教育環境を実現させているのだと思います。私たちは、このような実践から多くのことを学ぶ必要があると改めて感じました。



**写真 ゲストの上田哲郎さんからのコメント**

2023 年度も学生がそれぞれのペースでできる範囲の中で、フィールドワークに取り組み、社会的に意味のある成果をまとめてきました。この報告書は、それぞれのグループで 1 年間を通してまとめた論稿が掲載されています。ここでの成果が人や社会のあり方を考える上での貴重な情報を提供していると思います。3 回生の皆さま、本当にご苦労さまでした。

また、フィールドワークやインタビューを快くお引き受け下さいました NHK プロデューサー兼解説委員の竹内哲哉さん、京都トライアングルの佐々木和子さん・元晴さん・メンバーの皆様、豊中市自立生活センターで活動する上田哲郎さん、社会福祉法人創思苑のパンジー・メディアのディレクターである小川道幸さん・理事長の林淑美さん・当事者や職員の皆様に心よりお礼申し上げます。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

## 第1章 大阪府豊中市のインクルーシブ教育の実践内容についての一考察

### —障害当事者へのインタビューを通して—

岩田真奈・宇佐見梨夏・佐竹皓介・高橋裕人・山本佳奈

#### 1. 研究の背景と目的

大阪府豊中市では、1978年に策定された豊中市障害児基本教育方針により、障害のある生徒もない生徒も同じ教室で同じ授業を受ける、独自の「インクルーシブ教育」を50年間実施してきた。二見(2017)は豊中のインクルーシブ教育の歴史について明らかにしているが、現在の豊中市のインクルーシブ教育の具体的なあり方や当事者の視点からの当時の経験について十分に記述されていない。そこで本研究の目的は一人の障害当事者として豊中市のインクルーシブ教育を経験し、現在自立生活センター豊中に勤務する上田哲郎(以下、上田さん)の生活史を通して、豊中市におけるインクルーシブ教育がどのように行われているのかを明らかにすることとした。

#### 1. 1. インクルーシブ教育の動向

日本の障害児教育制度は、2014年国連の障害者の権利に関する条約批准によりインクルーシブ教育へ転換しつつある。障害者の権利に関する条約24条によれば「インクルーシブ教育システム」とは、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的および身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能にするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、障害のある者が「general education system」(署名時仮訳：教育制度一般)から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供される等が必要とされている。

インクルーシブ教育システムの推進が求められる中、特別支援を必要とする障害児は急増している。文部科学省によれば、2012年から2022年の10年間で義務教育を受ける児童数が約90万人減っているにも関わらず、特別支援教育を受ける全児童数は約30万人から約60万人とおよそ2倍になっている。その内訳として、義務教育期間において特別支援学校に通う児童は、6.6万人から8.2万人と1.2倍増加、また小中学校の特別支援学級は16.4万人から35.3万人と2.1倍、通常学級による指導員については7.2万人から16.3万人となり2.3倍増加している。それに伴い特別支援学級、学校不足も深刻な課題である。文部科学省による令和3年度「公立特別支援学校における教室不足調査の結果」によれば、地域によって差はあるものの全国で3740室の特別支援教室が足りない状況である。

文部科学省は2022年4月に「特別支援学級及び通級による指導の適切な運用について」の通知により、支援学級に通う生徒について、「週の授業時数の半分以上を目安として特別支援学級において児童生徒の一人一人の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じた授業を行うこと。」とした。文部科学省の調査によると、特別支援学級の児童・生徒

のうち総授業時間の半分以上を通常学級に在籍する割合は小学校で 54%、中学校で 49%であり、現状障害に応じた個々の支援が十分ではないとしたためだ。この通知に対して、国連・障害者権利委員会による障害者権利条約に基づいた、日本の障害者政策の審査が行われた。委員会は障害のある子を分離する特別支援教育をやめることを勧告し、木部科学省の通知についても撤回を要請した。しかしながら、文部科学省としては、この撤回要請に対して覆す姿勢はない。また自立生活センターの上田さんも抗議をしている。こうした通知によって「原学級保障」でほとんどの授業を障害のある児童もない児童も共に同じ教室で学ぶ、豊中市のインクルーシブ教育の根幹を揺るがすものになっている。

## 1. 2. 豊中市のインクルーシブ教育のあゆみ

大阪府では、1970年代から人権同和教育と一致したことにより世界にも先駆けて「原学級保障」という独自のインクルーシブ教育が行われてきた。大阪では部落解放運動と障害者解放運動の共闘体制と、それに刺激を受けた教員の運動が背景としてある(二見 2017)。

豊中市において 1960年代、養護学級は拠点方式で、設置校に障害者別ごとに集められバスや電車で越境通学をする必要があった。それに対する反対の運動が同和地区の住民や教員や障害児の保護者によってすすめられた結果、1978年に『豊中市障害児教育基本方針』ができあがった。これに基づき 1980年代から障害児の生活と学習の場を養護学級ではなく、原学級に置き、共に学ぶ体制が実施されるようになった。現在豊中市の公立小中学校の多くで、支援学級に在籍する児童、障害のない児童がともに原学級で学んでおり、出席簿に 50音順で名前があり、通常学級に障害児がいることが当たり前の風景が生み出された。

## 1. 3. 健常児からの豊中市のインクルーシブ教育の実態

鈴木ゼミのゼミ生の一人による、大阪府豊中市のインクルーシブ教育について健常児の立場からの自らの経験について以下記述する。この学生は、小学校 1年生から 6年生まで豊中市立蛸池小学校に通っていた。全校生徒は約 300人。6年間障害のある児童と同じクラスで過ごした。クラスには自閉症と知的障害の児童が在籍しており、支援学級に在籍しながらも支援担当教員とともに通常学級ですべての時間を過ごした。

この児童はほかの児童と学習スピードが異なるため別の教材を用いて学習していた。例えば、算数の掛け算の授業中には簡単な足し算の勉強をしたり、漢字の学習中にはひらがなの練習をしたり、音楽の授業ではリコーダーではなくピアノを弾いたりしていた。これは同じ科目だけに限らず国語の授業中に足し算の勉強をするなどその時に応じて変わっていた。

また、勉強につかれたり飽きたりしたときは支援担当教員と散歩に出かけたり絵本を読んだりして過ごした。支援担当教員はほぼ毎年変わり、これは担任の先生や科目の先生が変わるように昨年担任だった先生が今年は支援担当教員だという年もあった。どうしても支援担当教員が付けられないときは別の児童が障害のある児童をサポートした。

休み時間も一緒に過ごした。休み時間中は支援担当教員がいることもいないこともあったが、基本的には児童主導で過ごしていた。ドッジボールをするときは手をつないで一緒に逃げたりみんなが盾になったり工夫しながら遊んでいた。

行事にも参加していた。たとえばマラソン大会や運動会のリレーでは支援担当教員が伴走していた。リレーでは4チームあり50m走のタイムをもとに平均が同じくらいになるように組まれていたため不満を漏らす児童は一人もいなかった。小学校1年生のときに学年全体に障害のある児童の特性について母親から説明があった。また、その児童は知覚の公立保育園出身であることも合わせ、ほかの児童は障害のある児童の理解が自然とできていた。自分が通った小学校に支援学級があったということすら知らなかったくらいに当たり前のように通常学級で過ごしたと当該学生は語った。

## 2. 研究の方法

第2節では、研究の方法について説明する。

### 2. 1. 調査研究の方法

まず、調査研究の方法は以下の通りである。2023年7月10日に同志社大学新町キャンパス臨光館306教室にて、14時55分～16時50分に鈴木ゼミ3回生のインクルーシブ教育班5名が、自立生活センター豊中の上田さんにインタビューを行った。私たちは、以下のインタビュー項目による半構造化インタビューを行った（写真①）、すなわち、1) 当時の上田さんのクラスの在籍生徒について、2) インクルーシブ教育のあり方について、3) 障害担の先生の予算についてなどである。

なお、本研究では、私たちのインタビュー調査以外に、鈴木良教授が行ったインタビュー調査のデータも分析の対象とした。鈴木教授は、2023年3月10日に豊中CIL事務所に於て13時10分から17時30分までインタビュー調査を行った。



写真① 上田哲郎さん 同志社大学新町キャンパス臨光館306教室にて

### 2. 2. 調査対象者の概要

第二に、調査対象者の概要は以下の通りである。

上田さんは NPO 法人 CIL 豊中主任相談専門と豊中市障害者自立支援協議会会長を担っている。「CIL 豊中」の CIL (Center for Independent Living) は、自立生活センターを意味する。自立生活センターとは、どんなに重い障害を持つ人も、地域で普通に自立生活できる社会の実現を目指して、自立生活及び権利擁護に関する事業活動を障害当事者が運営主体となっておこなっているサービス提供機関である。上田さんは、豊中市の小学校と中学校の普通学級に通い、豊中市のインクルーシブ教育を経験した当事者である。

### 2. 3. 倫理的配慮

第三に、倫理的配慮については、日本社会福祉学会の研究倫理規程に基づく研究ガイドラインを参照した。インタビュー対象者に事前に了解をとってインタビューを録音して文字起こしをして、トランスクリプトは調査対象者の上田さんに見ていただいた。本研究では歴史的な事実を記録に残す必要があり、本研究では調査対象者の承諾を受けた上で実名にした。

## 3. 調査結果・考察

### 3. 1. 分離教育の経験・小学生に上がったときのギャップ

上田さんは、1976 年 4 月 6 日に北九州で生まれ 2 歳のときまで横浜で過ごした。その後、父親の転勤で豊中に引っ越した。

就学前までは「しいの実学園」という肢体不自由児の施設に通っていた。リハビリと保育がメインであった。

上田：母親と一緒に、朝、バスが迎えに来て、午前中はリハで、午後から保育で、とか。

日にちおきに、今日は午前中リハとか、今日は午前中保育とか。そういう、感じで、過ごしました。(2023/3/10)

リハビリの内容は筋肉の活性化を目的とした、「ボバース法」、「ボイタ法」である。上田さんは、いまは必要だと思えても子どものときは毎日泣いていたと言う。

上田：子どもの人権というのは、そのときはなかったから、早期に、早期発見、早期療育という、走りて来たから、とりあえず、リハビリをして、姿勢とか、しんどい姿勢で、ずっと、形を、とってとか、しんどくなって、しんどいといっても、もうちょっと、もうちょっと、あと 1 分、あと 1 分、あと 10 秒、あと 10 秒って長いんです。ずっとあと 10 秒って言われて、それで、しんどくなって、いつも泣いていました。で、自分の場合、今ふりかえったら、やっぱり、理学療法は、必要だったかなあって、ということは、思っています。(2022/3/10)



胸の筋肉が硬くなると呼吸がしにくくなったり声が出にくくなったりしてしまうため、身体がやわらかい状態を保つために理学療法が必要である。

上田さんは小学校 1 年生、2 年生の 2 年間通常の小学校には通わず、茨木養護学校に通った。2 年間のうち 1 年間は集中的なりハビリをした。

上田：一人です。だから、後から、親に聞いた話では、母子分離を、させたかった、ということも目的と、あと、就学前、地域との学校とも、やりとりのなかで、地域の学校の校長先生から、もうちょっと自立、自立してから、来られたほうが、いいんじゃないかと。この前のシンポジウムでもちょっと言ってかと思うんだけど、それで、前言われて、とりあえず、2 年くらいは養護学校に行って、そのあいだに、また、入院でもさせて、身辺自立させて、そういう、親たちの中でも、いろんな計画があったみたいなんで。（2022/3/10）

両親の考えや地域の学校の校長先生の助言から親元を離れて入院した。上田さん自身、入院は「嫌でした」と言う。慣れることなく最後まで嫌だと感じていた。憂鬱な時間だった。しかし、養護学校は楽しかった。

上田：だって、遊び道具も、障害もった子にあわせてくれるわけだから。（中略）。そのなかで、一番、動けるほうだったから、なんかあったら、勝手に、決めれるのは、全部、自分。こんなに、楽しい、時間は、ないんじゃないですか。話すのも、大人やから、先生は、ちゃんと、こどもの話しに、あわせてくれるから。こういうこと言ったら、嬉しがるんやろうなあって考えて話してくれるから。よけいにもう自分がそこで完璧よ、俺、みたいな感覚になってしまいませんか。そんなに、楽しい、楽しい。誰が、転校したいと思います？でも、2 年生の秋に、帰ってきて。（2022/3/10）

3 年生から地域の学校に移ると言われた時は「実は嫌」だった。近所の友達の幼稚園に 1 回だけ行ったときに感じた「うじゃじゃ感」や子どもが多く「がやがや」しているのをしんどいと感じていた。両親は 3 年生から地域の学校に通わせると決めていたと言う。両親は障害があっても普通学校に行けるものだと思っていた。

上田さんは 3 年生から地域の学校である豊中市立東豊台小学校に通った。

上田：最初は、泣きじゃくっていました。なんで、泣きじゃくってかっていうと、やっぱり さっき言った、がやがや感が、はんば。（中略）。養護学校ではほぼほぼ、皆無やったんです。隣の学年まで、かなり 離れてたし。学年でおったけど、学年でも 15 人くらいだし。その中で、話しができる子は 3 人くらいだし。運動場で

遊ぶ子なんかいないし。放送もないし。廊下も広いし。全部、風の音で、自然な音しか入ってこないし。そのギャップってすごいからね。それは、いきなり、そんな、静かな環境から、ギャーギャーいう環境なんか、適応なんかできまへんやんか。やっぱり、多めにいって、3 か月くらいは、意味もなく泣いてました。ただ、そんなときで良かったなと今振り返ると思います。(2022/3/10)

上田さんは、養護学校と普通学校とのギャップで適応ができなく「泣きじゃくって」いた。しかし、もし茨木養護学校で高校まで過ごし、「明日から、地域で頑張る」と言われても一生適応ができなかったと上田さんは考えている。

インクルーシブ教育の普通学校にいった経験があったから、上田さんは地域で今適応して暮らすことができている。インクルーシブ教育での経験が、障害者にとって地域で生活して適応しやすいきっかけになるのではないか。

### 3. 2. 先生の対応：ゴザ

小学生の頃に、環境に慣れることが難しく、支援学級にうつることを先生に申し出たことがあった。その学校では、支援学級があり、環境は整備されていたからだ。ところが担任教員はその申し出を拒否した。その時の経緯について上田さんは次のように語る。

上田：「先生、しんどいです」って、言うたわけ。でも担任の先生は、しんどかったら、後ろで、ゴザしいて寝とけて、ほんまにゴザで。いかにも、はじっこが、すみのほうが、ぼろぼろのゴザをしいて、ねとけて言われたからさ。そこまで先生たちは、いわゆる原学級保障というものにこだわっていたのかなあ。(中略)

鈴木：ということは、担任の先生は基本的に分離じゃなくて。

上田：そう、めっちゃめっちゃ、今思えば、確実に、一緒に、なんでも、ここで全部やるっていう考え方じゃなかったかなあ。(2023/3/10)

「しんどい」ため、担任の先生に支援学級にうつることを申し出たが、否定されて教室の後ろにゴザを敷いて寝ておくようにいわれた。教員は可能な限り、障害があっても障害のない子供と一緒に過ごす時間を確保するために行ったことであった。

これについて上田さんは次のように思ったのだった。

上田：おんなじところは、おんなじなんやなあーと感じさせるように。さっきのゴザの話とか、(中略)。語弊あるかもしれんけど、時間かかるのは、まーしゃーないとして、それでもできることは、最後までさせる。それが、そんなときは、平等なんですよっていうことを、先生は、言葉じゃなくって動きで伝えたのかな。(中略)。おんなじクラスで、おんなじ時間を、環境の中で、大人が、障害をもった子を、対

等に、接することが、周りの子どもに、対する影響が大きいんやろなあっ、ていうことは、振り返って思う。良かった感じ。(2022/3/10)

上田さんは、その当時はいやだと思っていたが、振り返ってみると先生は平等という考えを行動で上田さんに伝えたかったのだと分かった。

このことから豊中市では、皆で一緒にいることを大切だという意識を持っていたと推察される。障害の有無に関わらず同じ空間にすることがまず平等であり、障害があることで分けられるということが平等ではない、という先生の意識からうまれた行動なのではないかと思われる。豊中の原学級保障を体現しているエピソードだと言えよう。

### 3. 3. 生徒同士のコミュニケーション

次に、豊中のインクルーシブ教育の特徴は生徒同士のコミュニケーションにある。小学生時代の生徒とのドッチボールのエピソードについて次のように語っている。

上田：いろんなリーダーシップとる子とかは、キックベースとか、ドッチボールとかも、俺が、行けば、なんとなく、自然に、上田がおるから、なんか、ルールを考えようかと、言ってくれる子もおったし。それなら、それだって言ってくれる子も、出て来るし。それでも、キックベースも、ドッチボールも、みんなと一緒にやってきました。

鈴木：それに対して、文句を言う人はいませんでしたか。特別ルールに対して。

上田：そんなときは、ほんまに、文句を言う子はなかった。

鈴木：じゃ、みんなで、考えて、やっていたってことですか。

上田：うん。

鈴木：へえー、すごいなあ。(2022/3/10)

生徒同士でキックベースやドッチボールを行う際に、上田さんに配慮してルールを変えていた。

上田：それも、たぶん、やっぱりそれも振り返ったら、やっぱり、そのときの担任を、担任の影響力もあるんじゃないかなあ。(中略)。(先生が)最初の方は、そういうルールも、みんなで考えましようねっくらいは、言うてたかもしれんけど。そこは、はっきりいって、あんまり覚えてないんです。3年生とか、4年生の頃も、1回言っただけで、受け入れるか、というたら、どうかなあと思う。思うから。やっぱり、おんなじクラスで、おんなじ時間を、環境の中で、大人が、障害をもった子を、対等に、接することが、周りの子どもに、対する影響が大きいんやろなあっ、ていうことは、振り返って思う。良かった感じ。(2022/3/10)

生徒同士で接することにより、お互いが楽しむために特別ルールなどの合理的配慮を、自らが進んでできていたのである。また、先生が障害の有無に関わらず、その時にできることを皆とすることが平等であることを他の生徒に見せていたため、それを見て自然に学んだのではないか、また、子どもたちが自然に合理的な配慮を行える背景には先生のかかわり方も大きく関わってくると推察される。

### 3. 4. 中学時の同級生との関わり

上田さんは障害ゆえに不便を感じることはあまりなかった。同級生たちが皆、上田さんを受け入れ、自然とサポートしていたからだ。上田さんは、インクルーシブ教育の現場には、「親切心」だけでなく「誰かがしなければ仕方ない」という雰囲気があったと感じている。上田さんは中学三年生のときの体育の授業でのエピソードについて次のように話している。

上田：誰かがしないと、という雰囲気、しゃーないやんけ、じゃやってやるか。まっ、親切心もあった人もいてると思うけど。例えば中3のときに、うわぐつ、はまりよくなかったから。ひものくつを、うわぐつでも、履いてて、体育が終わって、とぼとぼと、まっ、ゆっくり、教室に帰っていくときに、靴の紐が、はずれてき、そのとき、自分とぼっと見も、めっちゃやんちゃで、〇〇という子が、教室に帰ってたわけよ。紐ほどけてるやんけ、って言うてくれて。まっそいつとも、もう3年も同じ学校だからさ、俺ができへんのは、わかるからさ、しゃがんで、普通に紐を結びなおしてくれるのがさ、これは、はたから見たら、えっ、地域の子からしたら、えっという感じ。もういかにも、いかにも、僕ヤンキーみたいな子が、普通に膝ついてさ。そういう環境になってしまうわけ。それから、親切っていうわけでもない。紐がはずれて、しゃーないなあ、つけたるか。(2022/3/10)

障害の有無に関わらず、ともに過ごし、ともに成長していくにつれて、障害への理解が深まり誰かがやるからではなくその場にいる人がやるのが当たり前という当事者意識をもって、自然とサポートできるようになったのではないか。

### 3. 5. 中学校における教員とのかかわりのシステム

中学校も、上田さんは公立の学校である豊中市第十五中学校に進学した。中学校にも支援学級はあったが上田さんはそこに入ったことはなく、障害のある子は発達障害を含めるとクラスに3~3人はいた。授業の様子について上田さんは次のように話している。

上田：教科の先生が前におって、その横に書くのを手伝ってくれる先生がおって、今日はいいよって言ったら帰ってくれてたし。今日はいるって言ったらいてくれたし。

鈴木：へえー。その人は「障担（障害児学級担任、以下障担）」の先生？

上田：障担だけじゃなくって、空いている先生。

鈴木：空いている先生が？

上田：教科、教科っていつでも、空いている時間があるから、その先生が入ってきて、してくれたんじゃないかなあって、まっ障担かもしれへんけど。（2022/3/10）

本人の希望に基づいて、空いた先生がサポートする体制が整えられていた。また、豊中の小中学校では、授業の際は「障害児学級担任（現在では支援学級担任に名称が変わっている。）」障害児のいる普通学級に入ってサポートするという体制がスタンダードであるが、中学校では副担任などの「空いている先生」も入り込んでサポートするという仕組みになっていた。原学級保障のために先生が協力して取り組む仕組みが整えられている。

#### 4. 結論

本研究の結果、豊中市の先生が平等であるために一緒に障害のある子どももいない子どもも共にいるべきと考え、個人の行動でも、教員全体で共有して仕組みとしてできていることが分かった。

インクルーシブ教育によって障害児は地域、社会に適応するための学びの場となり、また、健常の子どもにとっても障害児と関わり、自然に同じ時間を過ごすために相手のことを考えて行動する経験につながる。こうした障害者や健常者がともに暮らすためには、両方に良い面があるインクルーシブ教育は障害者が地域生活を今後していくためには不可欠であるといえるのではないか。

#### 引用文献)

飯田和樹(2022)「教室から席がなくなるのはイヤ——「ともに学び、ともに育つ」大阪府独自のインクルーシブ教育、揺らぐ足元」

<https://news.yahoo.co.jp/articles/67ccef0194793a3d5f4f9975e280c25640f782a0>

2024年1月31日検索時点

二見妙子(2017)「インクルーシブ教育の源流：一九七〇年代の豊中市における現学級保障運動」現代書館

## 第2章 共に生きるために必要なもの—ダウン症児の母の生活史に依拠して—

市村杏莉・垣外中葉乃・金原初花・千田佳奈・山下杏樹

### 1. はじめに

#### 1. 1 背景

障害者権利条約の第19条では、「自立した生活及び地域社会への包摂」が謳われている。しかし、現在、日本の知的障害者の生活は家族介護や施設入所によるものが主流である。相模原で起きた殺傷事件に代表される入所施設における障害者の権利侵害、ケアの役割を担う家族の負担など、障害者を取り巻く問題は深刻である。田中(2022)が行った京都市内で暮らす知的障害児者の家族を対象とした調査によると、本人の年代が50代、60代でも家族と同居している割合が7割を超えている。また、ショートステイやホームヘルパー、ガイドヘルパーなどの日常生活を支える社会資源が十分に活用されておらず、約8割の人がケアを負担と感じている。その結果、障害者本人の暮らしの場の希望は「入所施設(34.8%)」「グループホーム(32.1%)」「自分の家(25.2%)」の順に多い。現状は権利条約第19条と大きく乖離していることがわかる。障害者とその家族の権利が保障される社会の実現が求められる。

佐々木・廣川(2021)は、ダウン症と知的障害がありながら地域で始めた自立生活について、母である佐々木和子さん(以下、佐々木さん)と自立生活を支援するヘルパー、自立支援を組み立てるコーディネーターの視点から描いている。様々な障壁がありうまくいかないことが多いなかでも、本人を中心に、生活を組み立てる方法を模索することを楽しんでいることがわかる。

#### 1. 2 目的

佐々木さんは、京都ダウン症児を育てる親の会・トライアングル(以下、トライアングル)元代表であり、著書の中で知的障害のある息子さんが自立生活する様子を述べている。しかし、自立生活に至るまでの経緯については明らかにされていない。本研究では、1) 子のインクルーシブ教育と自立生活を支えた母の生活史を具体的に描き、2) そこから“共に生きる”ことを実現するために必要な条件は何かを明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 2. 1 調査研究の方法

2023年7月3日15時から17時に同志社大学新町キャンパス臨光館306において、鈴木ゼミの3回生と鈴木良教授は佐々木さんにインタビューを実施した。また、参与観察として同9日11時から12時半まで京都市左京区にある息子の佐々木元治さんの自宅を訪問、その後15時から17時まで京都市障害者スポーツセンターで開催されたトライアングルの親子相談会に参加した。(写真①参照)



写真①（佐々木さんのインタビューの様子）

## 2. 2 調査対象者の概要

調査対象者は佐々木さんと、その息子元治さんである。元治さんは生後3カ月でダウン症と診断されており、佐々木さんは元治さんを育てた経験を生かしながら現在に至るまでダウン症児の親同士の交流する場を運営してきた。

佐々木さんが1985年に設立したトライアングルは、ダウン症児を育てる親が集まり、子どもたちのために、療育、生活面についての情報を集め、提供していくことを目的としている。2か月に1回会報を発行し、講演会やレクリエーション、ダンスにヨットなど、様々な活動を通して家族間の交流を深めている。また、障害を取り巻く諸問題を社会へアピールし、障害の理解をしてもらうための啓蒙活動も行っている。



写真②（トライアングルの活動の様子）

## 2. 3 倫理的配慮

本研究では日本社会福祉学会研究倫理規定にもとづく研究ガイドラインに則り録音及びトランスクリプトを作成し、トランスクリプトに関しては佐々木さんに内容を確認してい

ただいたうえで加筆修正したものをういている。なお本研究では歴史的事実を記録するために佐々木さんの了承を得て、実名で記述した。

### **3. 調査結果と考察**

#### **3. 1 戦いの始まり**

##### **3. 1. 1 自分へのショック**

1983年3月、出産から3カ月が経った時、病院の先生から元治さんがダウン症であるという告知を受けた。佐々木さんは「ただただ驚いた」と言う。自分の息子がダウン症であるということ以上に、自分自身がダウン症について何も知らないということに驚き、「ショックを受けた」そうだ。佐々木さんはその状態を、「ダウン症という引き出しが空っぽやった」と表現する。娘のあやさんを6年も育ててきたのにも関わらず、何も知らない自分に佐々木さんはがっかりしていた。

しかし、もう一度生みなおすこともできない、育てるしかない、引きずる間もなく、すぐに佐々木さんの「戦い」が始まった。

「その驚きは驚きとして、あんまり引きずらんと、これからは、この子のための戦いが始まるって。すごい、ふんふんと鼻息荒く。」

佐々木さんは子育ての傍ら、ダウン症についての勉強にも取り組んでいた。本を読んだり、専門家に会って話を聞いたり、走り回って情報を集めた。佐々木さんはもともとの性格もあり、ダウン症という未知の障害についての学びは興味深く面白いと感じていたらしい。そして、元治さんの出産前に自分の体の中で何が起こったのかを調べた時、減数分裂の複雑な作用や、遺伝子乗り換えの仕組みについて学び、佐々木さんは生物の本当の意味での多様性に気づいた。「自分がダウン症の子を生んだのは生物として当たり前なことなんだ」と、その事実を素直に受け止めることができたと言う。

「普通の子が生まれていくっていうのが当たり前じゃないよなって思って、本当に妙に感動して。自分がダウン症の子を産んだのは、これは生物として当たり前なことなんだ。それはそのまま、すごく素直に、すつんと落ちただけ。」

そこから佐々木さんは、元治さんを障害というくくりで育てることはやめていたそうだ。3歳ころまでは型はめなどの療育にも挑戦していたが、元治さんの強い抵抗を受け、「この子はこの子でいいや」と受け止め、保育園も地域の普通保育園に通うことを決めた。

##### **3. 1. 2 ダウン症の子どもを持つ母と当事者との出会い**



佐々木さんが、元治さんがダウン症であることを受け止め、育てることができた背景には、同じ境遇に立つお母さんとの出会いがある。元治さんがダウン症であるという告知を受け、自分の「ダウン症という引き出しが空っぽ」だと気づいたとき、佐々木さんはどうしていいのかわからなかった。そんな時に、京都の児童福祉センターに通い、後に「仲間」となる、ダウン症の療育を受ける他のお母さんたちに出会った。佐々木さんは、児童福祉センターだけではなく、他にもたくさんの情報を集め始めていたため、出産直後にダウン症の告知をされた親の不安に寄り添える親の会を仲間と共に立ち上げた。

佐々木さんは、ダウン症の子どもを持つお母さんとの出会いだけではなく、当事者の方の話聞く機会も得ていた。元治さんの生後 12 カ月前後、障害を理由に差別的な扱いを受けた障害当事者が集まり、医療者に対する文句を言う会に参加。そこで佐々木さんは車いすに乗る一人の参加者に驚きの一言を言われる。「障害者の一番の敵は親や」と。それは、その一人の当事者だけではなく、日本の障害者団体「青い芝の会」の主張であった。佐々木さんは、これから育児を頑張ろうと意気込んでいるときに言われたその一言に、本当に驚いたそう。親の会はあくまで親の立ち位置。当事者の話を聞くことでたくさんの情報を得たという。あまり言葉を発しない元治さんの考えを知りたいときにも、当事者の言葉が参考になることがあった。

「親の立ち位置に立つか、子どもの立ち位置に立つ、この話になるんだけど、もしかしたら、そうかもって。それ以来、私は『子どものために』っていう言い方は、絶対しないの。これはためにならないかも分からないけど、取りあえずお母さんは、これしか判断できひんからこうするわって。こういうやり方で、やってきたんですよ。」

佐々木さんの興味持ちで、行動力もある性格。また、いろいろな学びを得ることができた同じ境遇に立つお母さんや当事者との出会いもあり、元治さんのための「戦い」が前進していったのである。



写真③（親の会で相談し合う様子）

### 3. 2 普通学級の重視

元治さんの就学先を考える頃、佐々木さんは「当然」姉と同じ地域の普通学級を選択した。普通学級に障害者の存在がないことが自身の「ダウン症の引き出しが空っぽ」であった原因だと気づき、分離教育による健常者と障害者の分断が社会にひずみを生むと佐々木さんは問題意識を抱くようになった。

「社会はいろんな人がいて、歯車のように凹凸がかみ合いながら動いていると思ってるんです。それで、ぐーっと進んでいくというか、動いていくって思っているの。一部の突出した人だけで物事を決めると、ひずみが起こり、決して誰にでも優しい社会にはなり得ない。」

#### 3. 2. 1 子どもの立場で考える —障害児を普通学級へ 全国連絡会との出会い

しかし、元治さんの入学に対して、校長をはじめとする学校の体制は差別的で、厳しい言葉で責められたという。そこで、佐々木さんは「障害児を普通学級へ 全国連絡会」の電話相談を利用した。これは、「すべての子に差別のない生活と教育を保障すること」を目的に、その名の通り障害児を地域の普通学校に通わせる方針をもって、情報共有を行う全国的なネットワークを形成する組織である。障害児の就学についての相談に応じている。

電話でしんどい気持ちを訴える佐々木さんに対し、相談員は「しんどいのは、お母さんでしょ、子どもさんは違うでしょ」と声をかけたという。佐々木さんは「もうちょっと優しい言葉がほしかった」と振り返りながらも、この言葉に納得したという。子育てを親の立場ではなく、子どもの立場で考えることが重要だと考えるようになって、学校側の厳しい態度にもめげずにいられた。そして、この考え方がその後もあらゆる障壁と闘い、元治さんの自立生活が実現するまでに至る佐々木さんの子育ての基盤となった。

「たくさんのお母さんが普通学級に入るんだけど、めげていくお母さんがすごくたくさんいる。その気持ちは分かるけど、立ち位置を、立ち位置変えへんかったら、ずっと親の立場で考えていたら、その知的障害の子が、話は飛ぶけど、1人暮らしをしたいと言える選択ができる子、育っていかへんねん」

#### 3. 2. 2 先生からの差別体験と子ども集団の柔軟性

元治さんの入学した小学校では思いやりのある先生もいたそうだが、配慮のない先生に苦しめられたこともあった。1年時の担任の先生は、元治さんについて嫌味をいったり、教室移動で元治さんが困っているときに気にかけることをせず「(元治さんが)勝手にどこかに行った」と見捨てるような発言をしたりと、差別的だった。合理的配慮というものがない当時、佐々木さんが求めていたのは、バリアフリーの設備などの具体的なものよりも、常識的な「相手の立場に立って、物を言うこと」だったという。

佐々木さんが奮闘する一方で、元治さんを取り巻く普通学級の子どもたちは純粋に違いを受け入れ、子どもたち同士と一緒に過ごすことを学んでいった。元治さんは小学校でできた友達が大好きで、今でもつながりが続いているようだ。

「ずーっと一緒にいることによって一緒に過ごすための知恵を子どもたちは学んでいきます。それはもう大人が介入なんかなくていい。もう先生なんか邪魔。先生がいないほうが、子ども同士でちゃんと学んでいくので、一緒にいるのが当たり前になってきました。元治が自ら1人暮らしを選んだのは、そんなあたりから生まれたんだなって。」

### **3. 3 普通高校進学**

元治さんは中学校進学に際し、地域の中学校に進むことを希望した。小学校入学に関してはまだ元治さんが幼かったことから佐々木さんが地域の小学校の普通学級への進学を決定したが、中学校に関しては元治さん自身に決めてもらったとのこと。佐々木さんは養護学校にある「監視」について問題視している。教師一人あたりの生徒数が地域の学校と比較して極端に少ないこと、特に高等部では農業や木工など「職業訓練」のような授業が行われるといった特殊な学習環境を子どもは望んでいないと主張する。

また佐々木さんは子ども同士の多少の衝突は障害、健常関係なく起こるもので子どもたちはトラブルを通して成長していくという考えをもっていて、子ども同士のトラブルに対しては口を出さないよう心がけているようだ。

高校進学の時期になり、元治さんは地域の夜間高校を受験した。しかし学力の面で進学が叶わず、代わりに通信制高校に進学することに決まった。この学校は週に数回授業を受けるために登校しレポートを提出することで単位が認定されるしくみだが、元治さんにとってレポートを提出するのは難しく、2年生の途中で退学となった。

佐々木さんは養護学校への入学条件についても問題視している。当時は地域の中学校の普通学級から養護学校に進学することは認められておらず、養護学校に進学するためには中学校の特別支援学級に所属することが求められたようだ。したがって中学校の普通学級に所属していた元治さんは養護学校への進学が認められるよう、中学3年生になるタイミングで特別支援学級に移るよう学校側からすすめられたようだ。この養護学校への入学条件について佐々木さんは国からの「いじめ」と表現している。

### **3. 4 一人暮らしへの道**

#### **3. 4. 1 一般就労へのつながり**

元治さんの就労について、障害者支援の作業所は始めから選択肢になかったようだ。

「ちょっと合理的配慮をしてくれたら、一般就労できる子が、いっぱいいるのに、なんでもそこに閉じ込めるのかが、私には本当に理解できなくて、最初からもう触れなかったというか、触れたくないという。」

しかし、先輩の母親から「養護学校からの一般就職は望めない。いつも親がアンテナを張って探すしかない」と聞き、一般就労の難しさを知っていた佐々木さんは、長い間、幅広くアンテナを張ってようやく、元治さんの就職先を二つ見つける。

一つ目は、地域のスーパーである。普通学級に通っていた頃、PTA で出会った母親から職場に障がいを持つ人がいるとみかんの袋詰めを紹介されたことがきっかけであった。最初は佐々木さんが付き添ったが、すぐに元治さん一人で通うようになり、既に 20 年以上続けている。

二つ目は、介護施設で、きっかけは佐々木さんが行ったアンケート調査に興味を示してくれた永原診療会の理事長との出会いから始まった。佐々木さんは、その介護施設の建て直しのタイミングを狙って、理事長に元治さんの就職をお願いした。元治さんのダウン症や合併症による体力を考慮して、障害者雇用の所定労働時間をこなすことは厳しいと判断したうえで、「週 2 回、時間も短く。できたら励みになるようお給料も、」と頼み込んだ。元治さんが実際に働き始めた頃は、叱られることもあったようだが、大事に育てられ、褒められ、15 年以上経った現在も一生懸命に働いている。

スーパーの仕事の紹介について、小学校の時に出会った母親たちとのネットワークができ、いろんな活動をしている中で人脈も広がりやすかったため、地域の普通学級に通ったことの意義があった。一方で、養護学校では住む地域から離れた数少ない同級生との交流しかない。

### 3. 4. 2 施設入所への疑問と一人暮らしへの希望

元治さんは 12 歳の頃、姉が一人暮らししている様子を見てあこがれたそうだ。

「娘が 18 歳で大学行くのに家を出たときに、1 人暮らししている部屋に元治を連れて行って部屋を見たら、顔が輝いてんねん、びっくりした、私。ええっと思う感じ。」

「そこで、『元治も、1 人暮らしする？』って聞いたら、『うん』って言うてうなずいた。そらそうやなって。変な言い方、すごく正常な感覚やなって思いましたよ、私。そう、それに決まってるわな、みたいな」

それから佐々木さんは元治さんの思いを尊重した。当時は、制度が整っておらず知的障害者の一人暮らしへの見通しを立てるのは難しいなかで、自立を模索し始めた。

結局、元治さんの病気の状態や佐々木さん自身の家族状況が落ち着いた時期に、JCIL に相談し、本格的に自立に向かっていった。元治さんが 35 歳のときだった。一人暮らしをする家やヘルパーは JCIL が用意してくれたそうだ。担当のコーディネーターは、元治さんの小中学校の同級生の兄で、もとの顔見知りであった。

元治さんがダウン症と診断されてから、佐々木さんは色々な施設に見学に行ったという。しかし、相模原の障害者施設殺傷事件を極めつけに虐待などの問題が当時から起きていたため、収容施設には入れないと決めていた。

「収容施設はもう絶対入れない。そんなん入れるぐらいやったらもう、ずっと一緒。2人で野垂れ死んでも、一緒とっていました。」

元治さんが大人になる頃、知的障害者のグループホームへの移行が推進されていた。佐々木さん自身も個室のグループホームの立ち上げに関わり、そこへ元治さんを試しに連れていき「一回、泊まってみる？」と元治さんに提案した。しかし、元治さんは黙り込んで拒否したそうだ。

### 3. 4. 3 ひとり暮らし - 母からの自立と本人の成長

2018 年の春から、元治さんは実家から徒歩 20 分ほどのところでひとり暮らしをしている。週 3 日の仕事をしながら、週に 6 日は夜の 3 時間、週に 2 日は昼 2 時間程度、ヘルパーを利用し、掃除、洗濯、料理などの家事を行っている。例えば、毎日の献立は元治さん自身が考え、クックパッドを使ってレシピを調べて、ヘルパーに希望を伝えながら一緒に調理している。また、週に 1 度は趣味のドラムのレッスンに通い、ガイドヘルパーと共にカラオケや買い物を楽しむなど余暇も自由に楽しんでいる。

一方で、毎週末には実家に帰って家族の時間を過ごし、お互いに頻繁に顔を合わせて調子を確認している。徒歩で行き来できる距離に暮らしていることで、緊急でなにかあったら行き来できる安心感があるという。

自立生活を初めて 5 年たった今、どのような変化があるか尋ねたところ、佐々木さんは「思ったよりはるかに、自立して成長し、賢くなりました。」「本当にいろんなことがよくできるようになりました。よかったしかありません。」と語った。母親が色々教えるのではなく、ヘルパーからの教でスマホやタブレットまで使いこなせるようになった。コロナ禍にも変わらない生活を続けていたそうだ。(写真④)



写真④（元治さんの一人暮らしの様子）

#### 4. 結論

佐々木さんの生活史を追って、知的障害者が地域社会で“共に生きる”ことを実現するために必要なことは何か検討し、以下の二点が明らかになった。

第一に、元治さんが生まれてから現在までに、様々な組織、人々との出会いが佐々木さんを支えた。

まず、佐々木さんを支援するフォーマルな団体の存在があった。元治さんの幼少期に佐々木さんは児童福祉センターに通って、後にトライアングルを立ち上げた同じ境遇の母たちに出会い、情報共有し、不安な気持ちに寄り添いあうことができた。普通学級に通わせる際には、様々な障壁があるなかで「障害児を普通学級へ」の就学相談を利用し、めげずにいようと思えた。元治さんの一人暮らしの希望を実現するための住居やヘルパーの確保など具体的な支援は、自立生活センターが担った。

さらに、元治さんが小学生の頃には近所の子どもと一緒に登校し、元治さんの学校生活を支えた。また、一般就労につながったのは普通学級で出会ったある母からの紹介がきっかけになった。このように佐々木さんの子育てと元治さんの自立にとって地域の人々もインフォーマルな資源として活かされた。

第二に、このような出会いと闘いのなかで作りあげられてきた母としての佐々木さん自身の想いが元治さんの自立を叶えたとわかった。まず佐々木さんは元治さんがダウン症とわかってから、ダウン症について勉強することを楽しんだ。そこで、障害がある・ないことを生物の多様性として受け入れていた。それからは元治さんを“障害児”として育てることをしなかった。元治さんの進路について、養護学校や入所施設を選ぶことは障害児者と健常児者との分断を意味する。そのため、佐々木さんの信念には反するものだったし、分離教育や社会構造はいびだつたと指摘する。実際に普通学級へ入学した元治さんは、クラスメイトと共に学ぶ学校生活を楽しんだ。

母としては、「青い芝の会」の障害当事者や「障害児を普通学級へ」との関わりを通して、親の立場と子どもの立場の区別を認識した。そして、子どもの立場から親が何をすべ

きかを考えることを基本にして子育てに励んだ。この姿勢があっこそ、元治さんは自身の意思を自由に示して一人暮らしを希望することが可能になった。佐々木さんは元治さんの希望を受けて、障害を理由に諦めることをせず、普通学級、一般就労、自立を支え、障害のない人と地域で共に生きることを実現させた。

しかし、現代の日本社会では、佐々木さんのようにダウン症児の自立生活を実現させている家族は少ない。トライアングルの中でも、2023 年度時点で、500 家庭ほどのうち、5 人しか自立生活を送っていない。今回、ダウン症児の自立生活を支える母である、佐々木さんにインタビューすることはできたが、他の、支援学級や施設、グループホーム、家族と一緒に過ごすことを支持する方にはお話を聞くことが出来なかった。フォーマル・インフォーマルな様々な支え、佐々木さん自身の行動力があって、元治さんの自立生活は実現したわけだが、今の社会で、多くの方が同じように自立生活を実現することは難しい。「自立した生活及び地域社会への包摂」が謳いながらも、誰もが自立生活をできる仕組みがなく、未だ支援学級や施設内での生活、グループホームを支持する人が多くいることは、今の日本の課題であると考えられる。

#### **参考文献)**

- 佐々木和子・廣川淳平（2021）『自立生活 楽し!! 知的障害があっても地域で生きる 親・介助者・支援者の立場から』解放出版社
- 田中智子（2022）『京都市に暮らす障害のある人・家族の生活実態調査～安心して暮らせる地域をめざして～』「子どもと親の SOS をキャッチする仕組みを考える」実行委員会・京都障害児者の生活と権利を守る連絡会

### 第3章 障害者のイメージ形成とメディアの役割 —パンジーメディアにおけるフィールドワークから考察する—

安嶋泉・中村杏・桃野峻輔

#### 1. 研究の背景

私たちは障害者に対するイメージはメディアの力によるものも多いと感じたため、障害者のイメージがメディアによってどう改善するかに興味をもち研究を始めた。

熊田（2017）は、社会福祉法人創思苑のパンジーメディアでは知的障害者が中心となりメディアを制作していることを明らかにした。ただし、詳細は明らかにされておらず、パンジーメディアの 1) 制作経緯と内容、2) 当事者の参加状況、3) 意義や課題を明らかにすることを研究目的とした。

#### 2. 研究の方法

##### 2. 1. 調査研究の方法

第一に、インタビュー調査と、参与観察による質的調査研究を行なった。

具体的にはまず、2023年7月17日に同志社大学新町キャンパス臨光館306号教室において、鈴木ゼミメディア班（安嶋 泉、中村 杏、桃野 峻輔 の3名）と鈴木教授が社会福祉法人・創思苑のパンジーメディアに勤務するディレクター・小川道幸さんと理事長・林淑美さんにインタビューを行なった。インタビューガイドによる半構造化インタビューを実施した。質問項目は以下の通りである。

- ・小川さん、林さんに関する基本情報
- ・パンジーメディア設立のきっかけ、理由
- ・パンジーメディアの特徴
- ・番組制作への実際の当事者の関わり方や内容
- ・制作番組、ドラマ等の題名や内容に関して
- ・見てほしい対象者に関して
- ・マスメディアと障害者の関係性について
- ・NHK とパンジーメディアとの違い
- ・メディア活動を行なっている他の事業所に関して
- ・パンジーメディアの活動を通して届けたい思いと、実際の反応の違いに関して

次に、2023年9月12日パンジーメディアの撮影現場にて、参与観察を行なった。パンジーメディアにおいて、当事者やスタッフによる番組のリハーサルの様子を見学し、その後当事者とスタッフと意見交換を行なった。





写真上：パンジーメディアの小川道幸さんと林淑美さんへのインタビューの様子

## 2. 2. 調査対象者の概要

第二に、調査対象者の概要は以下の通りである。

社会福祉法人創思苑は、生活介護の一貫としてパンを焼いたり畑を耕したり様々な活動を行っており、その一つの活動として、パンジーメディアがある。社会福祉法人創思苑の理事長は林淑美さんで、小川道幸さんは評議員のうちの1人である。

小川さんは過去にテレビのディレクター、ドキュメンタリーのディレクターなどを歴任しており、現在はパンジーメディアのディレクターとして活躍している。パンジーメディアに関わるまでは福祉番組に関わったことはなく、パンジーメディアと出会う前は、知的障害者のことは何も知らなかったという。

パンジーメディアは2017年8月に設立され、事業内容としては、知的障害の当事者による番組制作、放送などがある。パンジーの理念は「あまり働かないこと」であり、高い賃金にするとある程度そこに来る人が選別されてしまい、障害の重い人はなかなかそこで働くことができなくなるので、働くことに重きをおいていないようだ。

パンジーメディアは障害が重い人が多いため、基本の賃金は皆同じで月5500円ほどとなっている。当事者の1人が「寝てても5000円、起きてても5000円、遊んでも5000円」と言い出したようで、モチベーション維持のために、朝、夕のお弁当の配達や外の清掃、パンジーメディアに関わる人の中で撮影に関わる人、キャスター、講演に行った人などには追加で手当を出すという形をとっている。障害の重い人たちはどれだけ頑張っても2万円や3万円ほどの賃金が限界で、それを越えているところはあまりない。それならばどちらにせよ生活ができないため、生活の部分は生活保護を権利として主張し、彼らや障害当事者の人たちが、地域で暮らしていける権利をしっかりと訴えていく。そのようなことが仕事でもいいのではないだろうか、社会参加の側面を優先してきたという。

また、社会福祉法人・創思苑のホームページ（映画「あいむはっぴい！と叫びたい」の

項目)によると、今回インタビューを行った小川道幸さん、林淑美さんの詳細については以下の引用の通りである。

小川道幸さんは、1947年香川県生まれ。TV番組のディレクターとして世界110カ国以上を訪れ、内戦下のアフガニスタン、ヒマラヤ、サハラ砂漠縦断、アマゾン川全域、ナイール川を河口から源流まで辿るなど、世界の辺境地をテーマに多くの作品を制作。また、NHKで「最期のひばり」「満映映画人秘められた戦後」「山本五十六の真実」など、さまざまなジャンルの番組を手がけている。

林淑美さんは、障害児学級の担任を経て、知的障害を持つ人の入所施設で4年間勤務。後に、「地域であたりまえに生きる」ことをめざす無認可作業所の設立にかかわる。1993年に社会福祉法人「創思苑」を設立。知的障害を持つ人と人間として信頼しあうことをベースに、だれもが地域で普通にらせる社会にすることをめざして活動している。

### 2. 3. 倫理的配慮について

第三に、倫理的配慮については以下の通りである。日本社会福祉学会の研究倫理規定に基づく研究倫理ガイドラインを参照した。インタビューの際には調査対象者の承諾を得たうえで、インタビュー内容を録音させて頂き、文字起こしをした。

トランスクリプトは調査対象者の小川さんと林さんに見て頂き、必要に応じて修正をした。本研究では、パンジーメディアの具体的な活動を詳細に記録する必要があり、調査対象者の承諾を得た上で実名で記録した。

## 3. 調査結果と考察

### 3. 1. メディア制作の経緯と内容

第一に、メディア制作の経緯と内容についてである。

まず、経緯として、林さんによると、2001年にスウェーデンのグルンデン・メディアを訪問し、知的障害者の情報発信の可能性を検討するようになった。グルンデン・メディアは知的障害者のために当時はラジオや紙など文字ベースで情報発信を行っていた。また、知的障害者だけでなく、移民にとっても有効な発信であった。

グルンデン・メディアへの訪問後、林さんは講演会に呼ばれることも増え、その際当事者を含めて90分であれば4人で分担し視聴覚の資料で補助しながら講演を行っていた。しかし、講演会は依頼がなければ発信できず、健常者であれば議論し合うことができるが、当事者の意見は社会に届きづらいという問題意識を感じるようになったそうだ。そこから少しでも当事者が意見を発信し、閉じ込めていた思いを開放できればとの思いから、メディアで発信することを決めた。

そして、古くからの知り合いで、TV番組のディレクターとして働いていた小川さんへ話を持ちかけたことからパンジーメディアの活動が始まった。小川さんは林さんを通じて、8年前に初めて当事者と会い、ありのままの姿を届けたいとの思いで映像を撮ったという。

次に、メディアの内容としては今日のニュース的なものである「パンジーの眼」、当事者の人生をたどる「私の歴史」、お料理番組である「パンジーキッチン」、そして他にもドキュメンタリーやドラマなどがある。また、内容を考える上で、大切にしているポイントが三つあり、一つ目は今、特に障害者の目の前で何が起きているかという「ジャーナルな目線」、二つ目はどこか一つは新しいものを入れる「サムシングニュー」、三つ目は本質をつくという「エッセンシャル」を大切にしていると話されていた。

## 3. 2. メディア制作における当事者参加の実際

### 3. 2. 1. 役割

第二に、メディア制作における当事者参加の実際についてである。

まず、インタビュー調査と参与観察を行った結果、キャスター2名、アシスタント・ディレクター1名、プロデューサー2名、スイッチャー1名、ノイズチェック1名、カメラ操作1名は知的障害者が担当していることがわかった。小川さんによると、他の就労支援施設等でよく行われている軽作業であれば当事者は何人かのうちの1人になってしまうが、メディア制作においては全員が主役であり、それぞれに役割があると語っていた。具体的な役割や仕事内容について以下に述べていく。

山田さんはスイッチャーをされており、3台の映像を同時に見ながら指示を出し、カメラの切り替えを行う。必要な「絵」に合わせて、引きの映像やアップの映像など柔軟に対応をしていた。また、字は読めないが、『津久井やまゆり園事件から7年』をテーマとした25分のナレーションをした経験もある。小川さんと絵を見ながら文章を作り、小川さんが話すのに続けて山田さんが話し、編集で小川さんの部分を切り取る。こうすることで、職員がするよりも気持ちが伝わるナレーションになったそうだ。

有光さんは自閉症でいつもドラえもんと一緒にいる方である。音に敏感でノイズが入ったら手を挙げて皆に教えるというノイズチェックの役割を担っている。もともと人と何か作業をすることは苦手で声はほとんど出さないが、有光さんらしい伝え方で周りに伝えている。見学に行った際には職員でも難しい第2カメラの操作も任されていた。

豊田さんはカチンコに憧れて監督を志望し、今はアシスタント・ディレクターをしている。スタジオ撮影で見学者がいる場合に「本番中お静かに」とボードに書いて見せたり、台本をきっちり枚数を揃えて全員に渡したりするなど気が利く一面もあった。

辰巳さんはキャスターとして今ではすらすらとニュースの原稿を読み上げているが、初めは映像に写ることが苦手で、出演したいとは全く思っていなかったそうだ。転機が起きたのは津久井やまゆり園事件が起きた後、皆で思いを伝えあう中でそれぞれが話した言葉をもとにして『闇の王』というドラマが作成されたことに基づく。このドラマは虐待が横行する入所施設にて闇の王である施設長に対し、入居者が戦うストーリーとなっている。作中に出てくる「わしら生きてたらあかんのか」、「好きで障がい者として生まれたんじゃないわい」というセリフは辰巳さんが事件後に話した言葉がそのままセリフとして使われ

しており、それなら出演して自分自身で伝えようと思ったそうだ。そこから辰巳さんは番組に出演して自分の言葉で伝えるようになったそうだ。

福田さんもキャスターとして活躍されており、私たちがリハーサルに見学へ行った際、メインでニュースの原稿を伝えていた。カンペを出す職員とコミュニケーションを取りながら、しっかりとこなされていた印象である。

梅原さんと井道さんは二人とも車椅子の知的障害者でプロデューサーとして活躍されている。編成会議ではどんな番組を作成するか話し合い、撮影現場では実際に作っているものが本当に自分たちの思いを発信してるのか、あるいは健常者の思い込みなのかをチェックしている。見学に行った際はタブレットを使っ的確なアドバイスをされており、とてもわかりやすかった。



**写真上：当事者がキャスターとアシスタント・ディレクターを担当**



**写真上：当事者のプロデューサーが番組内容をチェックしている様子**



写真上：キャスターの読み上げ原稿を読みやすいように修正：合理的配慮

### 3. 2. 2. 協議

次に、上記のように当事者が役割を担うほかに職員も当事者も全員で話し合って番組の企画を決定したり、修正をしたり、制作のどの段階においても協議することを重要視していた。全員で話し合う段階としては編成会議と試写リハーサルの大きく二つあり、その内容や様子について説明する。

編成会議ではどんな番組を作るかという企画内容について、全員でぎくばらんに話し合うそうだ。当事者がやりたいと言ったことを深掘りして、その時は叶えられなかったことや現実では難しいこともドラマの中で実現するなど、様々な番組に挑戦している。

例えば、当事者の山田さん、辰巳さん、中山さんと小川さんが話している時に、障害があったことで当時は高校に行けなかった経験から、「もし高校に行けたら野球部に入って甲子園に行きたかった」、「応援団に入りたかった」、「恋をしたかった」といった叶えられなかった思いが次々に出てきたことがあったそうだ。そこからそれらを叶えるドラマを作ろうと小川さんが提案し、実際に作成することになったそうだ。ドラマの内容は天使の梅原さんが出てきて、3人を高校生に変身させるというものになっている。

試写リハーサルでは皆で全ての映像 VTR を確認して、意見を言い合うそうだ。当事者も職員も「あそこは面白かった。」「この字は間違っている。」などと意見を言い合って、リハーサルに向けてブラッシュアップを行い、スタジオでどのように話すか想定で考えていく。その際、当事者であるキャスターも自分が話す言葉を職員とともに修正しながら原稿を作成しているという。

このように協議を重ね、他の段階においても全員の意見を取り入れながら番組の制作を

進めている。その中で、健常者ではなく、当事者の目線で伝えられているのか吟味しながら制作している。

### 3. 2. 3. 合理的配慮や健常者の関与

最後に、合理的配慮や健常者の関与について、小川さんや他の職員が大切にしていることについて述べていく。パンジーメディアでは主役は当事者であり、当事者がまだできない部分を職員らが担っているだけであって、できるようになったら当事者に任せるようにしていると話していた。このため、決して命令せず相手が座っていれば自分も横に座って同じ目線の高さで、同じ方向を向いて話すように意識されているという。

そして、「あなたは、できませんってことを一切、言わない。」と小川さんは語っており、たとえ周りから見ると不可能に思えることもその人がやりたいと言えば全力でサポートしている。例えば、生まれてからずっと全く目が見えない田辺さんがカメラマンをやりたいと希望された時にはまずカメラを持って揺れないで歩く練習をしてもらい、見せたい風景をレポートしながら撮ってきてもらったこともあるそうだ。

田辺さんは知っている町の風景を匂いで判断してパチンコ屋、パン屋、お好み焼き屋ではなくたこ焼き屋といったように紹介し、風が吹いてきた時は木を映して風の風景を撮ったのだという。それぞれがどのようなことをできるのか全く分からないので、何事もやってみて考える、そして当事者がまだできない部分を職員が手伝い、できるようになったら当事者へ任せる、こうした考えのもとでメディア制作が行われている。

見学に行ったスタジオでのリハーサル時には、セリフが書いてあるカンペに、読みやすいように文章を区切ったり、絵を配置したり様々な工夫が見られ、その人に応じた方法を模索していた。当事者主体と言っても実際は職員が主体となって進めている施設が多い中、パンジーメディアでは当事者が主体となるために細かい部分にもこだわりつつ、強い信念をもって様々なことにチャレンジされているように感じた。

### 3. 3. 当事者によるメディア制作の意義と課題

第三に、当事者によるメディア制作の意義と課題について、番組の制作や内容、視聴者といった観点から述べる。

まず、意義について2つ挙げられる。一つ目は、NHKといったマスメディアと比べて、パンジーメディアは当事者参加を重要視することによって、「リアル」を届けることができている点である。マスメディアは視聴率やスポンサーなどの関係で、福祉コンテンツを制作することが難しく、そのため「障害者」をテーマとする番組は非常に少ない。また、一言に障害者といってもその範囲は広く、制作の現場は健常者が中心となっているため、数時間取材を行なって作った番組であっても、肝心な点がわからないことも多い。

しかし、パンジーメディアでは健常者のみの意見にならない番組を作りたい、当事者のうちに秘めた思いや考えをメディアを通して発散してもらいたいという考えのもと制作を

行っているため、当事者の生の声が伝わる番組となっている。

二つ目は、当事者の自己実現につながっている点である。障害者就労の多くは、その人がやりたいかどうか、向いているかどうかに関わらず、軽作業や掃除など大人数のうちの一人となってしまう仕事であり、当事者が選べるほどの選択肢はまだない。しかし、メディア制作においては全員が主役であり、それぞれに役割がある。また、パンジーメディアでは自分でやりたい仕事を選び、挑戦できる環境にある。そのため、メディア制作という現場で働くことによって、自己実現が可能だと言える。

次に、課題についてである。それは、パンジーメディアの視聴者の多くが当事者やその支援者などであり、対象者が限定的になっていることである。多くの人、主に一般市民に視聴してもらいたい思いはあるが、福祉コンテンツを一般市民に届けるのは難しく、マスメディアではなくインターネットを主な媒体としていることもあり、現状としては一部の問題意識を元々持っている人にしか届けられていない。ただし、DVD の上映会が多数開催されたり、NHK から取材があるなどマスメディアとの交流も増えてきたりしているので、うまく利用しつつ届ける範囲を広めていきたいと話されていた。

当事者がメディア制作に参加し、リアルな思いを一般市民へ伝えることで、世間の障害への理解を深め、ノーマライゼーションへと一歩近づくことができるだろう。しかし、一般市民へ広く届けていくためには専門性を低くして、わかりやすさやキャッチーさを求めていく必要もある。このような点から、パンジーメディアは、福祉や障害に興味がない方へいかに興味をもってもらえるか、当事者が自分たちでメディアを制作することで届けられるリアルな思い、自己実現の機会といった点においての意義や課題があると考えられる。

#### 4. 結論と今後の展望

調査を通して、パンジーメディアは当事者主体を最も重要視し、制作の過程において協議を重ねることによって、健常者の目線を排除し当事者の目線にこだわって番組を制作していることがわかった。また、それは全て当事者にやらせることではなく、必要などころは必要な分だけ手助けし、できるようになったら手を引くという形で合理的配慮も十分にされていた。このようにして当事者が番組制作を行うことは、先述したように当事者のリアルを発信できる点と自己実現の機会となる点において大きな意義がある。

しかし、福祉や障害に興味のない方まで広く届けるという点においては現状としては課題があった。ただ、この課題を改善していくことも大切ではあるが、それを目指すことによってパンジーメディアが重要視している当事者の目線で伝えることが損なわれてはならないだろう。そこで、私たちはパンジーメディアではなく、他のメディアにおいてこのようなメディアを目指すの良いのではないかと一例を考えた。

私たちは制作に関わる人と番組内容の 2 点からメディアについて考えた。まず、制作に関わる人の割合が偏り過ぎないことが大切ではないかと考えた。当事者と健常者、どちらかのみでメディアが制作されると、どうしても視聴者の幅に限界がある。広い範囲に福祉

コンテンツを見てもらう、興味を持ってもらう為には、様々な視点が重要になる。境遇や考え方が同じ組織で制作した番組よりも、それらが異なる者同士で制作した番組の方がより深い内容の番組を制作できるのではないだろうか。

次に、番組内容として現状の福祉コンテンツは圧倒的にドキュメンタリー番組が多い。ドキュメンタリーは、どうしても堅苦しい印象を視聴者に与えやすい。しかし、福祉は私たちの日常に関係していることであり、ライトに捉えてもらっても良いと感じる。バラエティーやドラマなど、気軽に見ることができる福祉コンテンツの制作も必要ではないかと考える。ただ、福祉という広い範囲で見れば、ここ数年で福祉コンテンツは着実に増えてきていると感じる。なかでも LGBTQ を取り扱う映画やドラマは、近年増えてきているように感じる。福祉コンテンツと言っても福祉分野は非常に広い。つまり興味を持ってもらいやすいコンテンツや分野から、福祉への興味を広げてもらうことも大切ではないか。

### 参考文献

熊田佳代子（2017）「地べたからメッセージを広げる強み—知的障害者自らが社会に発信する意義」『新聞研究』No. 796. 20-21pp

社会福祉法人・創思苑ホームページ、映画「あいむはっぴい！と叫びたい」公式サイト

<https://www.pansyfilm.com/staff/index.html>

2024年1月22日閲覧



# 資料

## 報告会でのパワーポイント資料

## 豊中市のインクルーシブ教育の実践内容についての考察 —障害当事者へのインタビューを通して—

岩田真奈・宇佐見梨夏・佐竹皓介・高橋裕人・山本佳奈



## 研究の背景

50年前から「インクルーシブ教育」を行う  
大阪府豊中市

二見妙子(2017)が豊中市のインクルーシブ教育の  
歴史を明らかにしているが現状の記述は十分でない

## 研究の目的

インクルーシブ教育を経験した当事者の生活史を  
通して、大阪府豊中市でのインクルーシブ教育の  
行われ方について明らかにする

## 調査方法

- 日時: 2023年7月10日14時55分～16時50分
- 場所: 同志社大学新町キャンパス臨光館306教室
- 対象者: 自立生活センター豊中の上田哲郎(以下上田さん)さん
- 方法: 半構造化インタビュー



※鈴木良教授が2023年3月10日に豊中CIL事務所にて13時10分～17時30分まで  
行ったインタビュー調査も分析の対象とした

## 研究結果

1

教員の意識

2

クラスメイトとの関わり

3

障害担当教諭  
(支援担当教諭)の入り込みの体制

## 研究結果と考察①

- みんなが一緒にいることを先生が意識をしている
- 障害に関わらず、同じ空間にいることが平等である

(例) 上田さんが教室にいるのが「しんどい」と訴えた  
ときの先生の対応

## 教員の意識



出典: 鈴木良教授 2023年度 障害者福祉論 第8回授業資料  
NHK2023年5月9日(火)放送、ハートネットTV“インクルーシブ教育”を考える(1)障害のある子どもと共に

## 研究結果と考察②

クラスメイトも自然と合理的配慮ができていた

(例)  
ドッチボールの際の生徒同士のコミュニケーション

## クラスメイトとの関わりの様子



出典: 鈴木良教授 2023年度 障害者福祉論 第8回授業資料  
NHK2023年5月9日(火)放送、ハートネットTV“インクルーシブ教育”を考える(1)障害のある子どもと共に

## 研究結果と考察③

- ・豊中では障害児担当の先生が同じ教室内に入り込んでいる
  - ・本人の希望により、先生がサポートする体制が整えられている
- (例) 支援が必要な授業のときの「空いている先生」の動き

## 入り込みの様子



出典: 鈴木良教授 2023年度 障害者福祉論 第8回授業資料  
NHK2023年5月9日(火)放送、ハートネットTV“インクルーシブ教育”を考える(1)障害のある子どもと共に

## 結論

上田さんは普通学校にいった経験があったから、地域で今  
適応して暮らすことができていると言っている。

→インクルーシブ教育での経験が、障害者にとって地域で  
生活して適応しやすいきっかけになる。

## 考察

- 障害者は地域、社会への適応ができる学びの場となる
- 健常の子どもには自然に合理的配慮を行う経験になる

障害者、健常者がともに暮らすために状態である障害者が  
地域生活を今後していくために、インクルーシブ教育は不可欠

## 参考文献

- [教室から席がなくなるのはイヤ——「ともに学び、ともに育つ」大阪府独自のインクルーシブ教育、揺らぐ足元](#) (Yahoo! ニュース オリジナル 特集)
- 二見妙子 (2017) 『インクルーシブ教育の源流：一九七〇年代の豊中市における原学級保障運動』現代書館

# 共に生きるために必要なもの

## ーダウン症児の母の生活史に依拠してー

市村杏莉、垣外中葉乃、金原初花、千田佳奈、山下杏樹

### 1. はじめに

～研究をするに至った背景～

"施設での生活を選ぶ知的障害者は多くいる"  
という気づき。

～研究のキーワード～

- 1) **インクルーシブ教育と自立生活**を支えた**母の生活史**を辿る
- 2) **“共に生きる”**ことを実現するために必要な条件は何かを知る



### 2. 方法

・鈴木ゼミの学生と、鈴木良教授による半構造化インタビュー調査

・日時: 2023年7月3日 15時-17時

・場所: 同志社大学新町キャンパス  
臨光館306

・インタビュー対象者: 佐々木和子さん

(京都ダウン症児を育てる親の会・トライアングルの初代代表)

※本研究では日本社会福祉学会研究倫理規定にもとづく研究ガイドラインに則り録音及びトランスクリプトを作成。トランスクリプトに関しては佐々木さんに内容を確認していただいたうえで加筆修正したものをを用いている。なお、本研究では歴史的事実を記録するために佐々木さんの了承を得て、実名で記述した。



ー参与観察ー

❖ 同9日には京都市左京区にある息子の佐々木元治さんの**自宅を訪問**

❖ その後京都市障害者スポーツセンターで開催された京都ダウン症児を育てる親の会、トライアングルの相談活動にも参加

### 3. 調査結果と考察

#### 戦いの始まり

#### 自分へのショック

**「ダウン症という引き出しが空っぽやった」**

佐々木さんは、元治さんがダウン症であるという告知を受けたとき、“自分が無知であること”にとっても驚いた。

#### 戦いの始まり

#### 同じ境遇に立つ母親たち・当事者との出会い

- ・母親たちと立ち上げた”親のための会”
- ・「障害者の一番の敵は親や」当事者の声

**「私は『子どものために』っていう言い方は絶対しないの」**

**「これからは、この子のための戦いが始まるって」**

### インクルーシブ教育へのこだわり

- ・地域の普通小学校に入学  
差別的な学校の態勢に苦勞し、  
[障害児を普通学級へ 全国連絡会]に相談  
「しんどいのはお母さんでしょ、子どもは違うでしょ」  
→ **子どもの立ち位置になって考える**
- ・元治さんは、普通学級での学校生活を楽しみ、  
自らの希望で地域の中学校への進学

### インクルーシブ教育へのこだわり

- ・養護学校＝**特殊な学習環境への抵抗**  
監視的な個別指導や職業訓練の重視、  
教科書のない授業に対する違和感
- ・養護学校の入学要件：中学で支援学級に在籍  
していることによる排除を問題視
- ・普通の通信制高校に進学

### 一人暮らしへの道

#### 特殊な生活環境への抵抗

- ・スーパー・介護施設での20年間の**一般就労**  
→元治さんの小学校時代のつながり、  
親の会の活動で出会った人からの紹介
- ・元治さん自身の**一人暮らしへの憧れ**  
→自立生活センターやヘルパーの支え

### 一人暮らしへの道

#### 母からの自立・元治さんの成長

- 「思っていたより成長し、賢くなった」**
- ・タブレットやスマホも使いこなすほどに！
  - ・週3日の仕事は今でも変わらず続けている

#### 4. 結論 「共に生きる」ことを実現した条件

##### フォーマル/インフォーマルな社会資源

- ・障害児を普通学校へ連絡会
- ・自立生活センター
- ・学校時代のPTA関係者

...など

#### 4. 結論 「共に生きる」ことを実現した条件

##### 2. 佐々木さんの想いや考えの形成：

- ①当事者主体、子ども主体、
- ②特殊な学習・生活環境への拒絶

## 参考文献

佐々木和子・廣川淳平

『自立生活 楽し!! 知的障害があっても地域で生きる  
親・介助者・支援者の立場から』

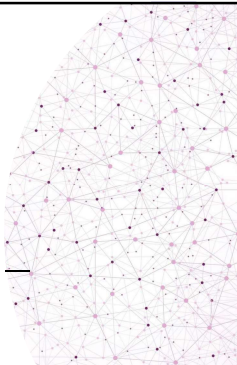
解放出版社 2021年

# 障害者の イメージ形成と メディアの役割

—パンジーメディアにおける  
フィールドワークから考察する—

鈴木ゼミメディア班

安嶋 泉 中村 杏 桃野 峻輔



## 目次

- 1.研究目的
- 2.調査研究の方法
- 3.調査結果と考察
  - 3-1 メディア制作の経緯と内容
  - 3-2 メディア制作の当事者参加の実際
  - 3-3 当事者によるメディア制作の意義と課題

## 1.研究目的

障害者のイメージはメディアによって  
どのように改善されるのか

⇒「メディアと障害」をテーマに研究を開始

- 1.どのような経緯でメディア制作が  
開始されたのか
- 2.当事者がメディア制作にどのように  
参加したのか
- 3.どのような意義や課題があるのか

## 2.調査研究の方法

- 1.インタビューガイドを使用した  
半構造化インタビュー

対象者⇒ 社会福祉法人 創思苑  
パンジーメディア

ディレクター・小川道幸さん  
理事長・林淑美さん



2. パンジーメディアにおける参与観察

パンジーメディアにおいて、当事者やスタッフによる番組のリハーサルの様子を見学後、当事者やスタッフと意見交換



## 参与観察時の様子



写真上：当事者キャスターとアシスタント・ディレクターを担当



写真上：キャスターの読み上げ原稿を読みやすいように修正：合理的配慮



写真上：当事者のプロデューサーが番組内容をチェックしている様子

## 3.調査結果と考察

### 3-1.メディア制作の経緯と内容

きっかけ

2001年スウェーデンのグルンデンメディアに訪問



当事者の意見を社会に発信したい！！

### 3-1.メディア制作の経緯と内容

内容

パンジーの眼（今のニュース）、私の歴史、パンジーキッチン、その他（ドキュメンタリー、ドラマなど）

ポイント

ジャーナルな目線、サムシングニュー、エッセンシャル



### 3-2.メディア制作における当事者参加の実際

知的障害の当事者が担当する役割

キャスター2名・アシスタントディレクター1名・プロデューサー2名・スイッチャー1名・ノイズチェック1名・カメラ操作1名

### 3-3.

#### 当事者によるメディア制作の意義と課題

##### 1.意義

当事者のうちに秘めた思いや考えをメディア活動によって世間に伝えることができる

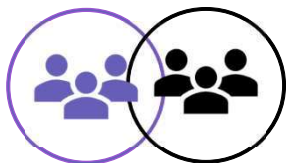
### 3-3.

#### 当事者によるメディア制作の意義と課題

##### 2.課題

福祉コンテンツを一般視聴者に届けるには限界がある  
問題意識を元々持っている人にしか届かない

## 私たちの考える 新しいメディアの在り方



特定の人が集まって  
制作するのではなく、  
様々な視点を取り入れる

## 参考文献

熊田佳代子（2017）

「地べたからメッセージを広げる強み—知的障害者自らが社会に発信する意義」『新聞研究』  
No.796.20-21pp

